

【曲目解説】

●交響曲第1番 ト短調

フランスの作曲家、エティエンヌ・ニコラ・メユール（1763・6・22～1817・10・18）は、モンモランシー伯爵家の司厨長の子として生まれましたが、生地の教会のオルガン奏者であった盲目の老人にオルガンを学び、老師の死後、10歳で後を継ぎます。オルガン奏者として経験を積んだ後、1788年にパリに赴き、本格的にピアノと作曲を学びます。多数のオペラで名声を博し、生涯に約30曲のオペラを作曲していますが、後半生では、交響曲、序曲、合唱曲に力を注ぐようになります。

メユールは、今日では、決して有名とは言えませんが、ケルビーニとともに、フランス・オペラ史上、グルックやラモーとロマン派作曲家達の間位置する主要な作曲家であります。伝統的な形式を守りながら、ライトモチーフの手法や巧みな管弦楽法によって、劇的な表現力の増大に努めています。また管弦楽法の発展にも様々な貢献をなしています。

ベートーフェンとも親しく交流があったらしく、ベートーフェンは彼を高く評価していたとも言われます。本日演奏する交響曲では、曲の進行とともに（特に第4楽章）、ベートーフェンの「運命交響曲」とよく似たフレーズが現れ、耳を驚かせます。

●フルート協奏曲第1番 ト長調

モーツァルト（1756・1・27～1817・10・18）は、フルートという楽器を好んでいなかったと言われることが多々あります。「我慢ならない楽器（フルート）のために作曲していると頭が変になりそうです」と父親宛の手紙に書いています。まあ、余程虫の居所が悪かったのか、フルート愛好家からすれば大層な言われようですが、2曲のフルート協奏曲、ハープとの二重協奏曲だけでなく、オペラや特にピアノ協奏曲の緩徐楽章での扱い等、フルートという楽器の魅力がよく発揮されていて、さすがモーツァルト、というところでしょう。

本日演奏する第1番の協奏曲は、1778年1月から2月にかけて作曲されています。オランダの裕福な商人でフルート愛好家であった、フェルディナン・ド・ジャン（モーツァルトは父親宛ての手紙では、彼をインド人としています）の注文で書かれました。本来の注文では、3曲の協奏曲、2～3曲の四重奏曲でしたが、モーツァルトが作曲したのは、2曲の協奏曲、3曲の四重奏曲で、しかも協奏曲のうち1曲（今日2番とされているもの）は、以前に自身が作曲したオーボエ協奏曲の手直し、ということで、報酬は約束の半分以下であったようです。

なお、現在独立した作品として演奏される「フルートと管弦楽のためのアンダンテ」は、本日演奏する協奏曲の第2楽章の演奏が難しいということで、差し替えのために作られたと言われています。（S）

●交響曲第8番 ヘ長調

1812年7月、41歳のベートーフェン（1770・12・16～1827・3・26）は温泉保養地テプリッツに滞在、構想を練り10月には弟ヨーハンの結婚式に臨むためにリンツに赴き、本作の完成となりましたが、この曲に纏わる数々のエピソードには彼とその作品を知る上で意義深いものがあります。テプリッツ滞在中、高位の貴族ルドルフ大公に出あった際にゲーテは脱帽し、恭しい態度を取ったが、一方のベートーフェンは尊大であったという、19世紀ドイツの生んだ2人の偉大な天才の邂逅と個性の違いを端的に示している逸話、ドイツロマン主義文学の旗手の一人であり、後年グスタフ・マーラーの歌集「少年の魔法の角笛」(Des Knabens Wunderhorn)の底本となった同名のドイツの古民謡集の編者アヒム・フォン・アルニム(Achim von Arnim)の許婚で美しい才媛ベッティナー・ブレンターノ(Bettina von Arnim)がゲーテに宛てた芸術家ベートーフェンを賛嘆する美しく感動的な記述、そして凄まじい芸術創造精神への驚嘆とともに聴覚障害で社交下手、粗野なベートーフェンへの深い同情が記されたゲーテ自身による友人ツェルター宛の手紙などからも、このことはそれと知られましょう。

さて第8番の交響曲、その規模は9つの交響曲の中で最も小さい。第1楽章の単純だが生気に溢れたリズム、第2楽章ではロココ風の優雅な趣き、しっとりとした上品なユーモアが香しい。さらには管楽器が刻む変ロ長調の和音が刻む軽やかな十六分音符も印象深い。主題は1812年にベートーフェンがメトロノームの発案者として知られるメルツェルに与えた4声部のカノンと同じものですが、軽やかに刻むリズムからカチカチと動くメトロノームを暗示させることによって、発明者メルツェルを揶揄した機知とユーモアはいかにも微笑ましい。第3楽章はトリオのホルン二重奏、その牧歌的な趣きは長閑で明るく飽くまでも伸びやかです。第4楽章での弱音から始まる強烈なリズム。小粒ながらもこれらをきりっと纏め上げた厳しい古典的造形！その抑制された深くも美しい均衡！ニーチェ流の芸術美学の見解を借りれば、狂乱陶酔のディオニソス的の第7交響曲に対し、優雅に洗練されたアポロ的芸術の優れて比類ない典型がここにあると言えます。（尾朝篤；おともあつし）